

# 科学における未知と理解

三浦謙 (Ken MIURA)

お茶の水女子大学

科学的知識は、日常的信念体系のような、安定した環境の下での活動を円滑に実現するためのデフォルト的内容のものとは性格が異なる。解決すべき問題を提示し、未知の対象や新しい説明理論を導入することで、日常的な信念とは異質の記述や理解を形成する。従って、そうした記述や理解の意味論は、日常的な場面で前提とされる素朴な実在概念に訴えるような真理の対応説（あるいは他の選択肢）が、そのまま適用されるのは不適切である。公共的・間主観的な実在を積極的に改変・否定することが、科学の重要な側面であり結果であるからである。科学において主張される命題中の指示対象自体が、その文脈において積極的に提示されている。

そこで、哲学で議論されてきたような真理概念を科学の意味論に適用すると、科学の方法論を歪曲・単純化することになる。さらにこのことから、通常知識の規定である「正しい正当化された信念」を通じて、科学的知識の理解にも問題が生じる。以上が、科学を理解する上で、哲学的な真理概念を切り離すべき理由である。

ところで、こうした非日常的意味論・存在論の提示は、哲学史上いわゆるドグマティストの存在論においておこなわれてきたことである。しかし、18-9世紀頃の自然哲学から科学が現代化する過程で表面化することは、知覚や装置等の認識のための資源を持つ限界に起因するような、未知の事柄を明示することである。思想史上ではロックの不可知論、文化史的には地図に空白を残し測量の課題とすることが、並行的に見られる。

すなわち、(肯定的な内容の)科学的知識を形成する端初となる問題とは、それ自体、他の科学的知識によって発見されるものである。現状で説明できない現象（例えば銀河の力学的状態）や、仮定されるが未同定の対象（それを説明するためのダークマター）自体が、重要な科学的主張であり、何が科学的に知られていないかを確定することが、科学的知識の（否定的な内容を持つ）一部であると考えられる。このことが哲学的な形而上学の体系とは異なる重要な点であろう（ただし懐疑論と異なり、解決の可能性は保持する）。未知であることが明らかになった事柄も、科学的知識を構成するということである。このことも、科学的知識に単純な真理概念をもちこむことの問題を示していると思われる。

科学の各部分は、研究活動が存続しているかぎり未完成で開かれており、洋上で小修理をしながら浮かぶ安定性優先の船ではない（この比喻は日常的信念により適合すると思われる）。現在、知識論・認識論において、体系的基礎付けの擁護から、多元性や文脈性、非単調性や歴史性を知識の現実的な特徴づけとして取り入れる試みがあるが、科学的知識はまさにそのようなあり方を示すものであるのではないか。